

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 陳 悦

論文題目 李安（アン・リー）の華語映画における
視線のポリティクス

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 星野 幸代

委 員 名古屋大学教授 涌井 隆

委 員 椙山女学園大学教授 田所 光男

委 員 東洋文庫研究員 邵 迎建

本研究は、台湾出身で米国を拠点に活躍する映画監督李安（アン・リー、Ang, Lee）の4本の華語映画『ウェディング・バンケット（喜宴, *The Wedding Banquet.*）』（台湾・米国合作、1993。以降、『ウェディング』と表記）、『恋人たちの食卓（飲食男女）』（台湾、1994。以降、『恋人たち』と表記）、『グリーン・デスティニー（臥虎藏龍, *Crouching Tiger, Hidden Dragon.*）』（中国・香港・台湾・米国合作、2000。以降、『グリーン』と表記）、『ラスト・コーション（色、戒, *Lust, Caution.*）』（米国・中国・台湾・香港合作、2007。以降、『コーション』と表記）を研究対象として、映画における人物の視線のポリティクスと空間表象の考察を通して、スクリーンに可視化・不可視化された対象をまなざす視線の権力構造を論じたものである。以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

序章では、先行研究について整理し、本研究の問題意識と目的、方法について述べている。

李安の華語映画について、個々の作品研究あるいは英語圏の映画作品とともに論じた先行研究はあるが、華語映画系列としてとらえようとした研究はない。また先行研究は、論者が中華文化圏に属するか、欧米諸国に属するかによってそれぞれの地域的、同時代的傾向を反映している。中華文化圏の研究者は、李安の台湾外省人（日本敗戦後、国共内戦を契機に渡台した人々）という出自に基づき政治的視点から論じる傾向が強い。欧米圏では、トランスナショナルシネマないし華語映画のグローバル化という視座から論じられることが多い。但し、視覚装置としての映画の性質に沿って映像の技法とその効果を詳細に論じた研究は無かった。本論は従来の研究を踏まえ、ジェンダー・ポリティクス、視線、空間という三つのキーワードにより、李安研究における空間表象と人物造形とプロットとの連関を明らかにすることを目的としている。

ジェンダー・ポリティクスとは、先ず男女間の不平等を権力関係と捉えたK・ミレット『性の政治学』（1970）の用語、セクシュアル・ポリティクスに基づいている。塚田幸光（2010）はミレットの用語を受けて、国家間、男\女同士、階級・ジェンダー間などを含めた広義の概念、ジェンダー・ポリティクスを打ち出し、米国映画を分析した。本論でいうジェンダー・ポリティクスは塚田の定義を引き継ぎ、男女に限らずセクシュアルな或いはジェンダーの不平等に生じる権力構造を指す。さらに、「視線のポリティクス」という用語は、L・マルヴィ（1975）がハリウッド映画における女優と男性観客のまなざしに即して〈見る一見られる〉権力関係を読解した理論の枠組みに基づいている。加藤幹朗(1996)はマルヴィの理論を引き継ぎつつ、「視線のポリティクス」を提示しハリウッド映画に適用したほか、さらに検閲 - 製作側の〈見る一見られる〉権力関係に援用した。本論でいう視線のポリティクスは加藤の用語を引き継いでいるが、検閲と製作の関係は扱わず、もっぱら映画作品に対して適用している。

空間概念については、O・F・ボルノウの空間論に依拠している。ボルノウは、諸物への人間同士の関係がそれぞれの空間の性質によって特徴づけられていると考え、人物が生きている空間を「体験されている空間」と名付けた。本論はボルノウの理論を、映画内人物が如何に映画内空間を体験しているかを解読するために用いている。

以上の通り、視線の権力構造を論じるに当たって、本研究は映画内人物の視線、映画内空間および観客の視線という三つの軸を設定した。この二つのレベルの視線と、視線を交錯させる装置としての空間表象の意味を分析することにより、人物間におけるジェンダーの権力関係の解読を試みた。換言すれば、本論は、視覚装置としての映画の特徴から、映像テキストをカメラ技法の分析方法によって解釈しつつ、音声による意味づけを合わせて精読し、ジェンダーの視点から空間表象と人物

造型の関わりを描き出そうとするものである。

第一章では、ニューヨークを舞台に台湾人男性^{ウェイトン} 偉同、米国人男性サイモンというゲイ・カップルに、中国大陸出身の女性^{ウェイウェイ} 威威を主人公としてクィア・ファミリーの模索を描いた『ウェディング』を取り上げた。偉同と威威のシーンを分析すると、威威は異性愛社会に抑圧される女性の受動的なイメージを逸脱し、行為主導者であるとともに視線の権力者であるのに対し、ホワイトカラーの男性である偉同は、威威より社会的立場は上でありながら、〈見られる〉側であると解釈出来る。また一見伝統的家父長である偉同の父親について、諸空間での発言と位置とをたどることにより、その抑圧されたセクシュアリティを浮上させ、若い世代三人によるクィア・ファミリーには、隠蔽されてたき親世代の疑似家族と重なり合うことを論証した。このように、本章は『ウェディング』から男性優位の権力の崩壊と、さらに人種・階級の差異、中国社会のジェンダーとセクシュアル・マイノリティ等、対立するかに見えた諸要素の融合する可能性を読み解いた。

第二章では、現代台北を舞台に外省人の父と娘たちの恋愛模様を描く『恋人たち』を対象に、家、公共空間、職場といった空間に表象された多義的な父親像を中心に論じている。国民党の外交の場で料理長を務めた父親は退職して主夫となり、日本植民時代の残滓である家屋にて味覚喪失に陥っており、その意味で象徴的に去勢不安にあった。本章は、中台分離によって生じた飲食の融合を背景に、食と性をめぐるシーンの空間と視線の意味を詳細に分析することにより、性的危機を脱し、台北に融合していく外省人家族の再構築の物語として解説した。

第三章では武侠小説『臥虎藏龍』を原作とする『グリーン』を対象に、貴族社会から江湖（武侠社会）へ、さらにそれを超越した世界へと移動する女侠を軸として分析した。まず中華文化圏における武侠映画の系譜を整理した上で、ステレオタイプ化した女侠イメージを転覆させようとする李安の意図を明らかにした。次に、新疆の荒野、北京城および江南地域の茶屋、宿屋、洞窟、竹林など物語の展開の鍵となる空間をそれぞれ考察し、ヒロイン玉嬌龍がいかなる意図を以て配されているかを解明した。北京城で異性装で戦う嬌龍は貴族の子女としての規範から逸脱し、江湖に憧れる反逆者でありながら、その江湖世界にも反逆する行為主導者として造形されている。さらに、茶屋と宿屋での男装に扮した武闘、また荒野での戦闘から性愛に至るシーンにおける彼女の身体表現と性的欲望の表現は、意識的に他者からの視線を捉えるパフォーマンスである。総じて『グリーン』は、空間の移動に沿って女性の内面的変化を叙述しながら、意思を持たなかったステレオタイプの女侠像を転覆し、男女ないし女性同士の視線の権力のメカニズムを攪乱しただけでなく、オリエンタリズムのまなざしに対して東洋イメージを戦略的に露出していることを論証した。

第四章では、中国人作家張愛玲の小説『色、戒』を原作とする『コーション』を対象として、李安が独自の解釈により映像で補った原作の「隙間」に当たるシーンを中心に論じている。まず、「孤島」(1937-41年12月までの英仏租界)^{Old Shanghai} 期の「老上海」を再現した都市空間は、ノスタルジックな時代感を演出しているだけでなくヒロインの出没する場に政治的意味と権力を付与し、彼女が暗殺のターゲットの性的欲望を煽り任務を遂行するための装置として機能している様を分析した。次に4つの麻雀シーンにおいて、女性同士の視線に政治的力関係およびその転移が現れている様を論じた。さらに2つのベッドシーンを取り上げ、男女の身体と視線の権力関係は日本、中国ないし傀

僞政権間の占領一被占領関係を象徴するとともに、男性中心の視線の権力を覆していると解釈した。またこれらの室内で展開するシーンについて、主人公二人を見張る秘書を監視装置になぞらえ、閉鎖的な空間が内包する権力構造を明らかにした。

以上の通り本論文では李安の華語映画について、映像化された空間に付与された意味を検討し、それらが人物間の視線の権力構造の装置であることを明らかにした。その考察のプロセスから、男女、親子、東西、同性愛／異性愛といった二項対立の境界線の攪乱と、それらへの抵抗が明らかになった。さらに、西洋のオリエンタリズムのまなごしを意識し、中華文化を戦略的に露出する姿勢がうかがわれることを論証した。

[論文の評価]

李安は台湾と欧米において使用言語、ジャンル、テーマともに多種多様な映画を製作してきたため、作品横断的な研究が困難であり、従来は彼の特性をグローバルな柔軟性として結論付ける傾向があった。それに対し本論文は華語映画という基準で作品を限定した上で、監督の一貫した手法とねらいが見出せることを明らかにした。方法論として、視線とそれが交錯する空間とを考察することによってジェンダー・ポリティクスを検討するという着想は妥当であり、その方法を駆使し、李安が観客の視線を誘導する様を明らかにする分析は見事であった。それは『ウェディング』、『恋人たち』、『グリーン』の分析、また『コーション』の各シーン解釈においては顕著に有効であったと言える。殊に、『コーション』における指輪と衣服の表象に対する観察、視線の交錯および麻雀のゲーム展開に、さらに絡み合う人物の権力関係とプロットに対するきめ細かな解読は高く評価できる。但し、『コーション』は人物のジェンダーに集中した分析では読み解けない複雑なテキストであり、国、民族の政治のファクターを分析対象に採り入れ、視線と空間の質をさらに精査しつつ論じる必要がある。また理論を用いる上では、論者の言葉で分析を十分に抽象化した上で、適用することが望ましい。

しかし、ここに提起した今後の課題は、本論文の価値を減ずるものではない。本論文は上述の通り空間における視線のポリティクスという方法論によって映画的な瞬間をとらえようとした意欲作であり、申請者のユニークな観察眼と映像解釈の力量が発揮され、新たな解釈と今後の研究に資する多くの指摘が説得力を以て提示されている。また、母語話者以外には極めて困難であるにも関わらず中国語圏での研究では看過されがちな、中国の方言に表れた人物の権力関係を解読したという点でも華語映画研究に大きな貢献を果たしたと言える。

従って、論文審査委員は全員一致で、本論が博士學位論文として水準に達していると判断した。